Remember Forever

鮮血の刻印

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒｅｍｅｍｂｅｒ　Ｆｏｒｅｖｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ３３１９Ｚ

【作者名】
鮮血の刻印

【あらすじ】
貴方は、幼き日に交わしたを覚えていますか？
『ずっと一緒に居よう』――――小さい頃に契った名ばかりの婚約。その約束を交わしてから１０年以上の時が流れた。
仲の良いクラスメート達と可もなく、不可もない普通の毎日を過ご

していた少年――――――ヴィレイサー。　そんなヴィレイサーが幼き日に１人の少女と交わした約束を夢で見たある日、ヴィレイサーのクラスに１人の転校生がやってくる。　彼女の名は、メイヤ・クロウフィールド。ヴィレイサーと深い関わりを持つ少女だった。

※原作は『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』と書いてありますが、原作知識がなくても読めます

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１　Ｈａｐｐｙ　Ｐｒｏｍｉｓｅ　～幼い婚約～　？（前書き

鮮血
「……と言う訳で、遂に始まりました」

ヴィレイサー
「今回のこのタイトルは、綾未玲　奏音♪さんに考えて頂きました」

鮮血
「綾未玲　奏音♪さん、本当にありがとうございます。
このお話は、僕が書いている『なのはＳｔＳ－Ｊ』の主人公であるヴィレイサーと、イツキ先生の作品、『魔法少女リリカルなのは～夜天を射る弓～』と『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　護るための力を持つ者』をコラボさせた学園恋愛モノです」

ヴィレイサー
「なのはの原作知識が無くても読めますので、是非ともご覧ください」

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１　Ｈａｐｐｙ　Ｐｒｏｍｉｓｅ　～幼い婚約～　？

懐かしい夢を、見ていた気がする……。

自分が子供の頃――――それも、とても幼かった頃の夢。

５歳か６歳ぐらいの。

俺はいつも、その子と一緒に遊んでいた。

他に遊び相手がいなかった訳でもないのに、何故か彼女といるととても安心できて、一緒に居る事が喜びになっていた気がした。まぁ、そんなものは子供心に分かるはずが無い。ただ純粋に遊びたかっただけなのかもしれない。

知り合ったきっかけは……もう忘れた――――なんて言っても疑わしくはないだろう。子供の頃の話だ。忘れている方が当たり前とも思う。

ただ俺は、何故か忘れる事が出来なかった。

確か、友人が投げたボールを取り損ねて、それが転がっていった先に、その子が居たんだったと思う。他の子供と混じって遊んだりせず、ただ欄干に寄りかかって見ているだけだったのが彼女だ。

俺は、何を思ったのか彼女の手を引いて一緒に遊んでいた。多分、幼心に遊びたかっただけなのだろう。

それから俺は、彼女の姿を見つける度に遊んだ。彼女も、俺を見つけては俺の手を引いて一緒に遊んでくれた。

いつも目一杯の時間を使って遊びまわり、時折遅くなって親に怒られる事はあったが、彼女と遊べたのだからそれでも良かった。

『ごめんね、――――――くん。　おとーさんの都合で、引っ越す事になったの』

ずっと一緒――――――いつも互いに言い合っていた言葉がそれだ。だのに、それはあっさりと崩れ去った。彼女が引っ越す事になったからだ。

『そっか……』

『ずっと、一緒だと思っていたのに……』

気落ちする彼女と同様に、俺も落胆していた。

『じゃあ、約束しよう』

『約束？』

俺の言葉に、彼女は顔を上げてくれた。

『いつかまた、会える事を約束するんだよ。
で、また会えたら、今度こそずっと一緒に居よう』

子供の俺が考えた事は、今の俺からしたらバカげている。手紙を書くだの、電話するだの、他にも最善の手はあったはずなのに。

だけど俺は、そんなのを思いつく事すら出来ず、彼女と約束を交わす事にした。

『なんだか、【こんやく】みたい』

『こん……や、く？』

少女が口にした単語に興味を示した俺は、【婚約】の意味を問いかけた。

『おかーさんが言ってたの。　【いつまでも一緒に居る事を約束するのは、こんやくって言うの】って』

『そうなんだ。　じゃあ、こんやくしよう』

『うん♪』

子供だったと言えばそこまでだが、俺は【婚約】の意味が彼女の教えてくれた通りだと思っていた。それが、【結婚を取り決める為のもの】だと知った時、俺はかなり驚いていた。

『――――ちゃん、ずっと一緒だよ』

『うん。　ずっと一緒だね、――――――くん』

その後、指切りをして俺達は別れた。

それからずっと、彼女と会えない日が続いたのが信じられなかった。寂しくて、泣きそうになった時もあった程だから、俺は相当、彼女の事が好きだったのだろう。或いは、【友達として】だったのかもしれないが。

どちらにせよ、あれから１０年以上の時が経過したのだ。今更再会出来るとは思えない。

だが、こんな夢を見ると言う事は、俺はまだ、彼女と会う事を強く願っているのだろう。

そういえば……彼女の名前は、なんだっただろうか？

「眠……」

うっすらと瞼を開いて、ヴィレイサーは呟く。

横になっている身体を仰向けにすると、今まで背中を向けていた窓側から差す光が、カーテンを照らしているのが分かった。

「今何時だよ……」

本当はもう少し寝ていたいのだが、学校に行く時間を過ぎていては困るので時計を確認した。

「あぁ…まだ平気か」

携帯電話で時間を確かめると、ヴィレイサーはさっさと布団に戻った。朝にはあまり強くないので、こうして布団にくるまっているのだ。

「ふぁ」

息を吐くついでに欠伸をして、しかし徐々に覚醒してきた頭を回転させていく。

「名前、何だったけ？」

先程まで見ていた夢の内容も大して思い出せないが、件の少女の名を必死に思い出そうとする。

「……わかんねぇや」

酷い話と思われるだろうが、どうせ相手だって覚えていないだろう。そう思い直し、自分をフォローする。

「朝食、作るか」

少し早いが、寝過ごすのは嫌なので着替えて自室を出ていった。

ヴィレイサーは一人暮らしの為、家事は自分が全てやる事になっている。それを苦に思う事はなく、慣れた手付きで朝食と昼食に持って行く弁当を作り始める。

「ダークにモーニングコールでもしてやるか」

手の空いた時には友人を起こしてやる。端から見れば友達想いなのだろうが、起こされる当人からしてみれば迷惑極まりない。何故かと言うと――――

《おい……》

「よう、お目覚めか？」

《ワンコールで切っただろ、お前！？　それも何度も！》

「起こしてやったのに何を怒っている？」

――――俗に言う、【ワン切り】を何度も繰り返すからだ。しかもやった当人はまったく気にしないので余計に質が悪い。

《お前、自分がやられたら嫌だろ？》

「大丈夫だ。　ちゃんと電源を切るか、着信拒否に設定するから」

《最悪だな》

「じゃあな」

《おい、こら！》

友人を起こす目的を果たしたので、彼は勝手に電話を切った。腹いせに向こうから何度も着信があっては面倒なので、電源も切る。

「食べるか」

朝食が完成したので、冷めぬ内に頂く事にした。

◆◇◆◇◆

戸締まりをチェックして、最後に玄関を施錠し、登校する。

いつもと代わり映えしない朝のはずが、ふとある場所が目に入り、足を止める。そこは、今朝見た夢に出てきた公園だった。

朝早くから遊んでいる子供はおらず、しんとしている　夢を見た所為か、その公園の景色がいつもと違う様に錯覚してしまう。

「ん？」

しかし、よく見ると公園の中に人影があった。時折吹く風に合わせて、艶やかな黒髪とそれを一条に束ねている赤いリボンが揺れる姿はどこか神秘的で、ヴィレイサーは不思議と、視線が釘付けになる。

（女性？）

相手が女性だと分かった時も時――――

「何やってんだ？」

――――背後からいきなり声をかけられ、慌てて振り向いた。

「何だ、ダークか」

「『何だ』って……ご挨拶だな、ヴィレイサー」

むすっとした表情を見せる彼は、ダーク・アルフィード。ヴィレイサーがモーニングコールを称して電話をかけた相手だ。

彼とはクラスが同じで仲も良く、ヴィレイサーの信頼する友人だった。

「で、何をやっていたんだ？」

「あぁ、いや……」

すぐさま公園の方に視線を戻す。だが、そこには誰もいなかった。

（俺の見間違い？　あんな夢まで見るし、今度は見間違いかよ……
……ご執心だなんて、笑いの種にされるだけだな）

ダークには本当の事を言わず、『お前が来るのを致し方なく待っていた』と言ってやる。だが、ダークはそれに怒りを見せず笑い飛ばしただけだった。

「つーか、今日はフィアンセと一緒じゃないのか？」

「まぁな」

ダークと2人で登校するのもなんだか懐かしい気がした。と言うのも、彼には恋人が居るのだ。

「振られちまったのか」

「違う」

『可哀想に』とでも言いたいのか、ヴィレイサーは大仰に溜め息を吐いた。ダークの恋人は高町なのは　２人が通う学校では、美人と謳われている少女だ。

ダークは人目も憚らずなのはと毎日イチャイチャしており、周囲は妬むか呆れるかのどちらかだ。ちなみにヴィレイサーは後者にあたる。

「まぁ、学校で会えるんだからそこまで気にする必要はないが」

「『気になってしょうがない』って顔だぞ」

「それはそうだろう。　お前も彼女が出来ればそうなるさ」

軽く肩を叩いて笑うダークに、ヴィレイサーは密かに同意していた。あの夢を見て、そして先程通った公園を執拗に見ていたのだから、やはり彼女の事を追いかけているのだろう。

「ヴィレイサー」

「ん？」

「なんかいつもより呆けていないか？」

「んな事ねぇよ」

「ならいいがな」

ダークに指摘されて、ヴィレイサーは平然を装いつつ、顔に出ていた事に内心で焦る。彼はそれ以上ヴィレイサーに何も言わず、登校していく。

1度溜め息を吐いて、ヴィレイサーも後に続いた。

◆◇◆◇◆

「お、ヴィレイサー」

「カローラ先生。　おはようございます」

「あぁ、おはようさん」

昇降口から教室に向かい、階段を2階まで来た時、教師であるカローラに声をかけられる。

彼女は工学の教師で、その気さくな性格や授業の仕方が良い事で男女問わず人気がある。噂では何人かの男子生徒が挑戦したらしいのだが、見事に全て玉砕したとかなんとか。とは言え、高嶺の花と称されるなのはよりは人数が少ない。なにせ彼女は子持ちなのだ。正確には養子だが。

「丁度いい。　これから教室に行くんだろ？」

「そうですけど？」

「じゃあこれ、よろしく」

言いながら彼女が渡したのは大量のプリントだった。ヴィレイサーの隣にいたはずのダークは、任されるのが嫌だったのか、忽然と姿を消していた。

（あの野郎……）

「そいじゃ、任せたよ」

「……はい」

大仰に溜め息を吐いて、ヴィレイサーは3階にある自分のクラスに足を運ぶ。

「いい召し使いだなぁ」

「うるせぇ」

踊り場に逃げていたダークが、ヴィレイサーがプリントを持たされているのを見て笑う。

「断ればよかったじゃないか」

「断れると思うか？　俺は手ぶらだったんだぞ」

「それもそうか」

カローラの担当する授業が1限目にある時はいつもこうだ。彼女はいつも『丁度いいところに』と言っているが、ヴィレイサーが来るのを待ち伏せしているのは確かだろう。でなければ、毎度毎度、こうもプリントを押し付けられるはずがなかった。

賑やかに友人と話している者が多々いる教室に入り、プリントを教壇に置いてさっさと自分の席に着いた。その間にも、『また荷物持ちか』など笑われたが、もう一種の名物の様なものだった。

このクラスは2年生の時とメンバーが同じのまま3年生になる。

それは他のクラスも同様で、２年生の内に進路をある程度決めておく必要がある。文系と理系の両方を取れるのはこのクラスを合わせて２つ。そして、残りは文系と理系、それぞれに特化したクラスがある。

「進路、どうするかなぁ……」

「お前料理上手だし、コックにでもなれば？」

「人に振る舞えるほどの技量じゃねぇし」

いい加減、進路を決めないといけないのだが、ヴィレイサーは未だに決めあぐねていた。それは彼だけではないのだが、大体の人間は方向性ぐらいは決まっているようだ。

「ダークはやっぱ、なのはの手伝いだから専門学校か？」

「まぁな」

なのはの実家は喫茶店を経営しており、彼氏であるダークは彼女を支えたい気持ちがあるので進路は決まったも同然だった。

「早くしないとニートになるぞ」

「そん時はなのはのとこに厄介になるからいいや」

「それは嫌だぞ……」

机に突っ伏すヴィレイサーの前の座席から、ダークの呆れた声が漏れる。

「お前ら、席に着けー」

そして、いつの間にチャイムが鳴ったのか、担任のアルクが生徒に着席を促す。

「ホームルームを始める前に、転校生を紹介するぞ」

いきなりアルクの口から出た『転校生』の単語に、クラス中が俄に騒がしくなる。

「それじゃあ入ってくれ」

「はい」

アルクに言われて、閉められた扉の向こうから凛とした声が返ってきた　次いで、たおやかな所作で教室に入ってきたのは、1人の女子だった。真新しい制服に身を包み、初めての場所に足を踏み入

れて緊張している面持ちを僅かに顔から覗かせていた。

「メイヤ・クロウフィールドです。　よろしくお願い致します」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3319z/

Remember Forever

2011年12月11日20時53分発行